本興寺だより

令和三年
七月
第二二三号

「仏は、三界（人が生まれ、死んで生死流転を繰り返しながら輪廻する、迷い多きこの世界）を、ありのままに見ている。生と死は本当は消えたり現れたりするものではない」

（法華経　如来寿量品第十六）

まもなくお盆の時期を迎えます。新盆・旧盆の違いはあってもご先祖に想いをはせる大事な時です。

誰でも身近な家族や友人との別れを体験します。かつては生活を共にし、語らい、或いは助け合った大切な人は今どこにいるのだろうか？自分の思い、供養を亡き人はしっかり見届けてくれているのだろうか？など、生前の想い出と御霊への気持ちは尽きません。

人は五感（見る・聞く・嗅ぐ・味わう・触れる）で直接体験したことは信じますが、それ以外はなかなか信じられないのです。目に見えないもの、耳で聞こえないもの・・・それらが信じられるのは科学的に証明されたものだけという人も多くいます。例えば「神仏はいない」という人がいます。その人は「神仏がいないということを信じている」だけなのです。それが真実か否かは別なのです。

今の科学では、神仏がいるということも、存在しないということも科学的に、はっきり証明できていないのです。神秘体験や不思議な現象があっても、それが魂が絡むとも証明できていませんが、ましてそういうものは全くないと証明する方が難しいのです。

仏様は、人間の体には自然界と調和し、己の力を発揮してより良く生き抜くためのあらゆる力と智慧が備え付けられていると云われています。

科学の調査によると、人の遺伝子は約二二〇〇〇個あり、一個の細胞には六百ページの本が五百冊分程の情報が暗号のように保存されているということです。その内解明されているのはわずか３％とか。あと９７％は何の情報が何のために保存されているのかわからないということですが、生きていく上で必ず必要な情報に違いないのです。その中におそらく人類の有史以来のすべての情報、民族共通の行為、個々人の「業」に至るまで含まれているのでは？とも言われています。

人間の脳も天才と云われる人でも2割も使いこなしていないと云われます。人は肉体の能力のみならず、心も魂も無限の力を与えられて生まれているのです。

「自分のできることには限りがある」「どうせ自分はこの程度・・」と己に限界の枠を定めることが、運勢の伸びる力と意欲を削ぐ一番悪いことなのです。

私達は凡人ですので、この世の森羅万象の姿は漠然と見ていても、その中から私たちに示されている生き方、耐え方、調和の仕方に気付けないと云われます。

人間を含む全ての万象の命には、生と死の断絶はなく孤立した命もなく、相互に見えざる交流があり補完し合っているのだと示されています。

人生に苦悩や不幸が絶えないと思うのは何故か？そして人生で起こる出来事に対して私たちは理不尽と思えることでもなぜ自身に責任があると言えるのか？その答えは私たちの人生は今生だけのものではなく、過去幾世にも亘って輪廻転生（生まれ変わり）を繰り返し、そこで積み重ねてきた善業、悪業の蓄積を背負って生まれてきているからだと仏様は言われます。

決して白紙で生まれてきた訳ではない人生を、人はみな白紙で生まれてきたと固く信じて疑わない心から、他人との比較の気持ちが増え、慢心や引け目の心が苦悩を増すのだということです。人は誕生の時から皆、顔も体型も体力も能力も境遇も性格も違います。誰もが知っていることですから、人それぞれに応じた境涯の縁があり、違いがあるのは当たり前だと知っていても自分のこととなると願望が満たされなかった時、それが仕方がないこととは認めがたいのです。

イソップ物語の「ウサギと亀」の亀のように、自分の幸せという目的地へ視点を定め、足は遅くても、あせらず、立ち止まらず、周囲と競争の気持ちを持たずひたすら歩めばよいのです。

人生で起こるマイナスの出来事は己の心の闇が招き寄せたものであると云われています。私たちは自分の心に巣くう闇に眼を向けることが必要であると。自分でも気づかない、己のことしか関心がない心、自分の信条を絶対曲げない心、怒り、愚痴、むさぼりに自分を見失う心がその闇を深く大きくするのだと。

闇に光を当て、自身の心をありのままに知るには、自分の本当の命は今世だけではないという、ご神仏が示された事実を信じることなのだと云われています。

自分の境涯を素直に受け入れて運命をよりよく転換していくには、心の奥にある悠久の魂を認めることから闇が晴れてくるのです。

大切な人を見送る私たちも何時かは見送られて旅立ちます。魂のふるさとへ帰られたご先祖の御霊も、子孫からの心からの感謝の想い、また会いたいという郷愁の念が、魂の世界で通じ合えるということです。

ご先祖への想いを、お墓参りやご供養という形として表すことが、お盆なのです。想いと形（行動）は車の両輪です。

合掌　本興寺住職　中谷聰秀